**崩壊したものを集めまとめる 2017年11月5日**

**ヨハネの黙示録 7:9-17 スティンストラ牧師**

本日の日課にある黙示録7章の光景は、2000年前に最初にヨハネという人物に啓示された。私たちは天の御国のすばらしい光景を見ている。天の栄光へと召された数え切れないほどの大群衆が今や子羊(イエス)の玉座の周りに集まっている。その大群衆とは、驚くべきことにすべての種族、民族、言語から成る聖人たちであり、天に昇った主を仰ぐ礼拝に集まっている。私たちの目にはまことに異常にも見える。だれにも理解しがたいような驚愕してしまいそうな光景だ。

私たちが普段この世で見ている状況とは異なって、その礼拝にはあらゆる地域から、話す言語も異なる、知識があるものもそうでないものも、経済的に豊かなものもそうでないのもいる。この世で人生が終わるときにキリストから自由を授かった多種多様の人々が集まっている。今や彼等自身が神の御国に居ることを自覚し、すべての涙は拭われ、彼等の救い主を大合唱で賛美する天の礼拝に上げられている。白いローブに身をつつみ、熱狂的に勝利の棕櫚の枝を振り回し、完全に満足して安心している人々の海が地平線から地平線まで行きわたっており、彼らのホザナと鼓舞する大きな声が背筋をぞくぞくさせる。

その大勢の輝いた人々の中のほんのわずかだが、私が葬儀の司式をする機会を賜った主イエスにある兄弟姉妹である290人が含まれている。全聖徒の日にあって彼等が私の意識の中に突如として出現してくる。主イエスには彼等の表情や動作がはっきりしているのと同様に、私の心の中で彼等がはっきりとしている。それであたかも私が彼等の家に座っているかのように、また彼等といっしょに教会のために働いているかのように感じることができ、彼等が亡くなったときに味わった悲しみはもう克服されている。

私にはハリーの太い声が決して忘れられない、彼は自分たち自らを逮捕されるように追い込んでしまった間抜けの強盗たちのおもしろおかしな話をしていた。私にはエレノアのくすくす笑う声も聞こえてくる。彼女は88歳になっていたが、どうしても30マイル離れたドクターの診察しか受けないと言い張って、しょうがなくて彼女を私が当時乗っていた小さく車高も低くしかもコンバーティブルのフィアットスパイダーの座席に座らせシートベルトをしてあげようとして苦労している時だった。

この大群衆の中で、デュエインも輝いてくる。彼は知的障害をかかえ22才だったが、礼拝の最初と最後のろうそく点火・消灯の担当者が来れなかった時に代わって係りを引き受け、そして礼拝後は必ず私に「愛しているよ」と言ってから帰宅して行った。そしてその大群衆の中で親しかった友人たちとともに私の家族を垣間見ることができるのも確かにうれしいことだ。二人の祖母と一人の祖父、私の父、私の兄弟の一人の笑顔が見えてくる。

またキルトきちがいだった二人が100歳を迎え100本のろうそくを吹き消すという誕生会を祝うことができ、私の人生は多いに祝福された。だがその二人は誕生会に来ていた人々の名前を一人として思い出すことができなかった。また一歳になる誕生日を祝うことができなかった赤ちゃんたち4人もそこにいる。また25組のカップルはこの地上で困難だらけの結婚生活だったがそれらをものともせずに天国でしっかり互いの両手を握り締めあっている。

そして私のオフィスを訪れてくれたいろいろな人々のことを思い出す。アイダは何事も気にしないこの上なく幸せな性格で、いつも危ない運転マナーで教会の駐車場に入ってきた。ほかの車が注意を喚起するホーンを鳴らそうが、その音を消してしまうようなブレーキがキーキーなる車に乗ってきていた。 またベトナム人で獣医を営み、お酒好きのジムの顔も忘れてはいけない。彼は現代でいうPTSD(心的外傷ストレス)に悩まされており、彼の怒りっぽい性格は、彼がどんなに努力して怒るのをやめようとしても、すぐにがまんできなくなって怒り出してしまうのだった。

私はそのような完璧ではない聖人の集まりが、子羊の玉座の周囲に広がっているのを見てとてもありがたく思う。なぜならその光景が私をもっと大きな神の御国へと引き込み、私たちも信仰者としてその御国の一部であることに気づくからだ。私たちは日々の生活に身を削り、私たちの狭い世界の中で、ほんの身近な人々だけと崩壊することなく生きていけばよいと単純に思ってしまう。私たちは、人間関係の面でも、仕事でも、健康でもあるいは幸福でも、それらを脅かすものを避けようとする。

ジムに通い、教会に行き、ホールフーズのようなところで健康な食材を買おうとし、また少し退職後のために蓄え、またセラピストに訪問しようとすることもあるかもしれない。しかし、私たちの実際の人生はそれらをずっと続けることは不可能だ。それゆえに以前に天に召された人々から受け継いだものを、今一度じっくりと考えてみることは良いことだと思う。この信仰に生きた人々の広々とした光景は、単に私たちの道を整えてくれたというものではなく、この地で神の恵みを述べ伝え喜んで生きる道を示し続けている。

私が見ている光景は、堅い決意とか自己訓練などによってはだれも聖人になれないということを思い出させる。聖人の大群衆の中に含まれるということは、完全に贈り物なのであり、そしてなんらかの衝撃として必ずやって来る。聖人の大群衆の中で礼拝を守っている一人一人が、自分がその中に含まれていることに心から驚き、聞いてくれる人には誰でも、最終的に聖人の大群衆の中に入れたのは、主が可能にしてくださった奇跡に過ぎないことを伝えるだろう。

彼等はまずあなたがたに天において本当にいられるなどと想像もできなかった人々といっしょにいることが現実になることを教えてくれるだろう。この世では、同じルター派といえどもいっしょになろうとしないグループもあるし、バップティスト派、ペンテコステ派、ローマンカトリックなどの宗派に関して彼等は彼等でとなってしまう。この世では、私たちは肌の色が違ったり、また異なる大陸で生まれた人々といっしょに礼拝をすることに違和感を持ってしまう人々もいる。

そのような崩れた者たちを集めてまとめてくださるのは、イエスしかいないのだ。イエスのみが、私たちは私たち、彼等は彼等として線をひいてしまった境界を過去のものしてくださる。イエスのみが、私たちを徐々に救い出された神の家族の中に進むようにしてくださる。なぜならその家族の真ん中にいる方がいったいだれであるかが明らかになった時に、その真ん中のお方がどんなに崩壊してしまった私たちであろうが 支えてくださる方であり、その方のところに来れるという希望を持つことができるからだ。

全聖徒の日にあってヨハネに与えられたように私たちにも与えられたその光景は、この地上のあらゆる地域でわたしたちが出会う人々に心から述べ伝えるべきことだ。この地上においては救いの業はゆっくりとしか動いていないようである。しかし、この光景こそが私たちをこの地上に送り出して、どんな文化を持った人々ともその光景を分かち合えるようになる。なぜなら、そのとても価値のある世の終わりの状況を垣間見る中で、天にのぼられた主が、今もわがままで崩壊しているこの世を変化させようとしているからである。　アーメン